# 斬新なデザインと手間を惜しまぬ工程が、新しい伝統工芸を生みだした

## 肥後花莫蓙（ひごはなござ）

**熊本のイ草は、その生産量が全国の八割を占める、自慢の日本一のひとつ。大半のイ草は畳表として使われますが、松橋町の清香園では、洗練されたモダンなデザインの「肥後花莫蓙」を作り、新たな工芸品として注目を集めています。この花ござ作りに一から取り組んだ園長の山内泰人さんに、お話を聞きました。**

### 付加価値のあるイ草製品を作りたい

蒸し暑い夏の日、爽やかな肌ざわりが涼を誘った寝ござ。そんな懐かしさを呼び起こす花ござは、八代地方などイ草栽培のさかんな土地で、畳表ともに明治時代から織られてきたものです。

花莚（はなむしろ）こと花ござは、国内では岡山と福岡が主産地。清香園の花ござは織りこそ機械織りですが、ほかは全て園生の手作業。デザインをはじめ、イ草の選別、染色から仕上げまで、一貫した作業を行っているのが特徴です。

「花ござ作りは、園生の社会復帰のための地域に密着した職業訓練として、付加価値のあるイ草製品を作ろうと思ったのがきっかけ。実際にやってみたら、おもしろくて…」

一見素朴な花ござの持つ魅力、奥の深さが、山内さんをとらえたようです。

### 施設として初の伝統的工芸品指定

山内さんがデザインした第一作の花ござは、昭和五十五年、東京で開催されたクラフト展に出品され、いきなり入選。多数の問い合わせを受けるなどして注目を集めました。そして翌年、施設としては初の「熊本県伝統的工芸品」の指定を受けたのです。

赤、青、紫、黄色…。ハッとする鮮やかな色合いと斬新なデザイン。素材となるイ草を惜しまず使い、染めや洗いの段階でも決して手間を省かない、基本に忠実な制作が続けられています。

現在では「肥後花莫蓙」とのブランド名を持ち、関東を中心に県内外に熱心なファンを擁しています。

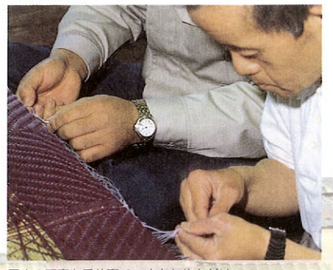
### イ草の持つ魅力をもっと追及したい

「機械織りの花ござのよい点は、複雑な模様が出せて丈夫なところ。展示会にみえる方は感覚的にハイレベルなので、常に勉強が必要です。もっとイ草の持つ魅力や可能性を追求し、アピールしていきたいと思っています」

時代を先取りしたデザインを目指す山内さんは、美術品やインテリアのディスプレーを見て回り、女性誌にも目を通して感性を磨きます。これが、現代生活にマッチした花ござが生み出される「素」なのかもしれません。

「花ござ作りによって、知的障害者の能力が認められ、地域の方にも喜ばれる。ほんとうに嬉しいことですね」。最後は福祉施設士の顔になって、話を結んでくれました。

フローリングにも合うモダンなデザイン。
伝統工芸館の展示会には熱心なファンが訪れる



園生の丁寧な手仕事で、丈夫な仕上がり。
買上げ品の修理は無料で引き受ける

「いいものを作って評価されることが、園生の生きがいにもなっています」

**知的障害者更生施設清香園園長**

**山内泰人（やまうちやすと）さん**

一九四七年　熊本市生まれ
一九八〇年　福岡県農業試験場筑後分場で花ござ制作技術の研修を受ける
熊日画廊で「第一回肥後花莫蓙展」開催　以後、熊本、東京、富山で毎年開催
日本クラフトデザイン協会主催「クラフト展」に出品し、入選
一九八一年　肥後花莫蓙が熊本県伝統的工芸品の指定を受ける
一九九二年　「第ろ回ゆうあいピック熊本大会」で花莫蓙ランチョンマットが公式土産品に
※日本クラフトデザイン協会会員、熊本県伝統工芸協会理事